

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月31日現在

機関番号：24501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520359

研究課題名（和文） 録音資料による日本語アクセント研究

研究課題名（英文） Studies in Japanese Accents Based on Recorded Materials

研究代表者

中井 幸比古 (NAKAI YUKIHIKO)

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：10221441

研究成果の概要（和文）：近畿から四国の方言を対象として、これまでに本報告者及び他の人々によって蓄積されてきた、アクセント調査録音資料・会話録音資料のデジタル化を行い、DVD-ROM 6枚・CD-ROM 1枚を作成して公開した。研究者が録音資料を共有することによって、アクセント研究の一層の進展をめざすものである。また、これらの録音資料に聞かれる、アクセント型の聞き取りを行い、当該方言アクセントの詳細を記述するとともに、式音調の音響的特徴の一端を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Recorded materials of the Kinki and Shikoku Dialects were digitized and published to researchers as six DVD-ROMs and one CD-ROM. Publication of the recorded materials will contribute to the development of the study of the Japanese dialectal accents. Based on these recorded materials, details of several accentual systems and acoustic properties of the “register tone” (*shiki-tone*) of the several dialects were clarified.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：録音資料、アクセント、京都方言、瀬戸内海方言、伊吹島方言、音響分析

1. 研究開始当初の背景

日本語諸方言のアクセント研究は、昭和初年以来、数多くの優れた研究成果をあげてきた。アクセント調査時の録音も多量に蓄積されてきたものの、個人所蔵かつ未公開のものが多い。公開されている音源もないわけではないが、まだまだ対象方言・分量・内容が限定されている。

一方、方言アクセントの衰退・変質が進行

しつつあるため、新たな臨地調査はこれからも重要ではあるものの、古い時代の録音資料が重みを増してきている。しかし、古録音資料に基づくアクセント研究はまだそれほど多くはなく、今後が期待される分野である。

デジタル化・公開された音源をもとに、新たに聞き取り・音響分析を行うことによって、記述をより客観的・精密的なものにするとともに、現在調査不能な上の世代から現在に至

るアクセントの変遷を明らかにすることが可能である。

本研究で対象の中心とするのは、近畿から四国北部にかけて分布する諸方言である。

2. 研究の目的

これまでに蓄積されてきた録音資料に基づき、日本語諸方言アクセントの解明を行う。また、録音資料のデジタル化・公開を行い、研究者が資料を共有することによって、研究の一層の進展をめざす。

3. 研究の方法

先学による録音資料として、昭和 40 年頃録音の、和田實・妹尾修子両氏の、瀬戸内海方言アクセントを対象としたオープンリールテープを取り上げ、そのデジタル化を行った。その中で、とくに資料的価値が高い香川県伊吹島方言について、録音資料を公開した。

伊吹島アクセントは、日本語諸方言の中で唯一、①伊吹島アクセントは 2 拍名詞の類の統合が 1/2/3/4/5 の第 1 次アクセントであり、② 3 式（高起下降式・高起非下降式・低起上昇式）と下げ核が弁別的な体系である。和田實・妹尾修子両氏は、和田實(1966)「第一次アクセントの発見——伊吹島」(『国語研究』22)などで、この伊吹島アクセントをはじめて学界に報告したが、この録音は、この報告の元になった、記念すべき、重要な録音である。

この資料に基づき、5 モーラ語までの発話のアクセント型の聞き取りと式音調を中心に研究を行い、本報告者の研究の当否を他の研究者が確認できるようにした。

このテープは録音時の電力供給状態が不安定だったため（伊吹島では当時ある種の自家発電によっていたという）、録音スピードが不安定である。デジタル化の際に、ある程度のスピード調整を行ったが、もとより発話速度の正確な復元は不可能であり、概略的な措置にとどまる。

さらに、伊吹島方言については、地元出身の三好兼光氏が昭和 50 年前後に会話を録音したカセットテープの一部をデジタル化した。和田氏らのものより録音年は新しく、録音状態は必ずしもよくないが、反対に話者の生年はこちらのほうが 10 年ほど上のものも含む点、また自然な会話が多く含まれている点が、資料として貴重である。

次に、本報告者自身の録音として、京都市方言に関するアクセント調査録音資料の整理編集と資料公開を行い、また式音調の音響分析を行った。対象は昭和 55 年頃からのカセットテープの一部と、本研究より数年間に行ったリニア PCM 録音である。前者（明治 30 年代生の話者に的を絞る）はデジタル化作業を中心に行い、編集整理・資料公開は後者（明

治 43 生の話者 1 名）を中心に行った。

4. 研究成果

4. 1 録音資料の整備と公開

平成 20 年度～23 年度にかけて、以下のよ
うな資料をデジタル化し、wav ファイル形式
のファイルとして、DVD-ROM または CD-ROM に
『方言アクセント録音資料』(1)～(7)として
収録・公開した (ISSN1883-6704。このうち
(3)のみ CD-ROM、他は DVD-ROM)。そして関係
者に配布した。作成したものの具体的な内容
は以下のとおりである。

(a) 『和田實・妹尾修子録音による伊吹島
アクセント資料—方言アクセント録音資料
(1)—』(平成 20 年度)。

(b) 『三好兼光録音香川県伊吹島方言会話
資料—方言アクセント録音資料(3)—』(平成
21 年度)

(c) 『録音・京都アクセント辞典(1)～(5)
—『方言アクセント録音資料
(2)(4)(5)(6)(7)—』(平成 20～23 年度)

録音資料の公開は、調査者・録音者・話者
の方々、及びそれらの御遺族の方々の御厚意
があったおかげであり、たいへんありがたか
った。厚く御礼を申し上げる。

(a)～(c)のうち、(a)(b)はアクセント史の
観点から最重要方言の一つである伊吹島方
言の、録音資料である。

(a)はすでに述べたように日本語アクセ
ント研究史の中でもきわめて重要な録音であ
るばかりでなく、現在では録音不能の、明治
30 年代生の話者のアクセント調査資料を含
む点が貴重である。分量的にもかなり多く、
計 7 時間 14 分である。聞き取り及び考察も
収録している。

(b)は会話資料であるが、これまでに知ら
れている伊吹島方言の録音の中でもっとも
早い生年の話者のものであり、これもまた他
に替わるものがない貴重な資料である。公開
したのは計 1 時間 34 分である。聞き取り及
び考察も収録している。

(c) 『録音・京都アクセント辞典(1)～(5)
は、京都市方言の録音であって、中井 2002
『京阪系アクセント辞典』(勉誠出版・書籍)
「概説編」に現れる語句の全項目、「語彙編」
の例文を含む全項目 (いくらか例文の増補を
行った)、京都の地名などの固有名詞類、『京
都府方言辞典』(和泉書院)のうち京都旧市
内で使用する俚言を中心とする項目、アクセ
ント類別語彙、小倉百人一首の京都アクセ
ントでの音読、その他を含む録音資料である。
すべての録音内容について、アクセントの聞
き取り結果も pdf ファイルまたはエクセルフ
ァイルで収録している。

京都方言関係の DVD-ROM(1)～(5)の、1 枚
ごとの、より詳細な内容をあげておく。

(1)は、『京阪系アクセント辞典』1～4 拍

体言の全項目・例文の音読である。録音時間 13 時間 07 分。

(2)は、『京阪系アクセント辞典』「語彙編」5～10 拍体言、動詞・形容詞、人名・数詞の全項目・例文の音読である。録音時間 12 時間 46 分。

(3)は、『京阪系アクセント辞典』「語彙編」の助詞・助動詞・用言の活用形、「概説編」の問題及び語例・例文、『国語学大辞典』（東京堂出版）のアクセント類別語彙表の音読、小倉百人一首の音読、京都及びその近辺の地名・固有名詞の音読である。録音時間 5 時間 24 分。

(4)は、『京阪系アクセント辞典』「語彙編」1～3 拍体言の例文を増補し再録音したものである。「この～。」「～が。」の形をすべての項目に追加した。録音時間 13 時間 09 分。

(5)は、『京都府方言辞典』の見出しのうち、中井の調査で、京都旧市内で使うという人があった項目のすべてである。例文はほとんど含まれない。録音時間 8 時間 04 分

録音は、すべて、明治 43 年生京都市中京区出身の 1 名の話者橋本ぬい氏に通して音読して頂いた。合計録音時間は 52 時間を越える。これは、1 名の話者のアクセント関係の録音としては、従来の資料の中で、共通語アクセントも含めて、現時点で、もっとも大規模な録音資料の一つに属するかと思われる。実際の録音作業時間はその数倍以上かかっており、橋本氏の御協力はきわめて有り難かった。

この話者の録音以外に、明治 30 年代生の話者のカセットテープ録音のデジタル化を進めたが、編集作業に手間取って作業が進まず、公開には至らなかった。アクセントの個人差の実態の記録としても今後の公開が望ましい。

(a)～(c)の CD-ROM・DVD-ROM には、上記のように、録音のみならず、アクセントの聞き取り結果を、pdf・エクセル・テキストファイルのいずれかの形式で収録している。また、(a) (b)については若干の考察・研究を pdf ファイルで収録している。(a) (b)の聞き取り・考察・研究については、最終年度に『香川県伊吹島方言録音資料について』として印刷を行った。

なお、(c)のうち、『録音・京都アクセント辞典(5)一方言アクセント録音資料(7)』だけは、聞き取り結果は音響分析ソフト praat の、textgrid の形式にしたがうテキストファイルであって、praat 上で、音声と聞き取り結果・読み上げた語句を連動して聴けるように

なっている。今後、この DVD-R0 これ以外のものについても同様の形式でファイルを作成したい。

4. 2 録音資料によるアクセント研究

前節で述べた録音資料に基づく研究について述べる。

録音資料(a)については、以下の諸研究を行った。

録音(a)に聞かれる単語のアクセント型の聞き取りは、本研究においては、5 拍体言を中心に作業を行った。4 拍以下の体言や用言については、すでに本研究以前に作業が一通り行われ、その結果も公表されている(中井幸比古 2001「香川県伊吹島方言のアクセント資料」上野善道編『消滅に瀕した方言アクセントの緊急調査研究』科研報告書、上野善道 2007「録音資料に基づくアクセント調査：香川県伊吹島方言の場合」『東京大学言語学論集』26 を参照)。本研究では、手が付けられていなかった部分の作業を行ったことになる。また、伊吹島アクセントについては、すでに、5 拍体言までのアクセント体系は、上野善道・佐藤栄作両氏によって明らかにされている(上野善道 1985「香川県伊吹島方言のアクセント」『日本学士院紀要』40-2、佐藤栄作 1985「香川県伊吹島方言のアクセント体系を考える」『国語学』140)。しかし、具体的な単語のアクセント型の聞き取り結果の提示は少なく、資料を提示すれば一定の価値を持つと考えたこともある。

そして、資料の聞き取りの結果、アクセントの世代差を中心に、以下の(ア)(イ)の 2 点を明らかにした。

(ア)昭和初年生まれ以降の、下の世代では、従来の和田實氏・上野善道氏らの指摘のとおり、下降位置の遅れが顕著になっているが、5 拍体言 L2 型(低起上昇式で第 2 拍に核)に限っては、明治 31 年生の話者では下降の遅れがなく、昭和初年生の話者で一旦後退が見られるものの、より下の昭和 20 年代初頭生の話者では再度逆戻りして下降の遅れが見られなくなっているという現象を新たに指摘した。下降の遅れはすべての音調型で一律に起こったわけではないのである。異なる方言の例として、香川県高松市方言でも下降の遅れが生じているが、ここでも遅れは一律に起こるわけではないことを中井『京阪系アクセント辞典』などで指摘したことがある。これらのことは、音韻変化としてのアクセント変化を考える場合、古くから中心的な研究対象であった 2 拍和語の変化と、多拍語の変化とをまったく同一のものとするものの危険性を示すものである。

(イ)低起上昇式の上昇位置は遅上がりで高音部は 1 拍が原則であるが、一定の条件下で高音部が 2 拍または 3 拍の場合があることが上野善道氏・佐藤栄作氏によって報告され

ている。今回の調査でも下の世代ではほぼ同一だが、明治 31 年生の話者には 2 拍高・3 拍高の音調は非常に少なく、ほぼ 1 拍高で統一されていることを新たに指摘した。高音部が 2 拍または 3 拍高い音調型は下降の遅れに伴って新たに発生した、あるいは該当する語彙が増加した可能性がある。

なお、下降位置の後退は揺れが大きい、アクセント核の位置の認定に不確定な点があることは、大きな問題である。また、4 拍以下では、高起下降式と高起非下降式の対立は無核の場合に限って聞き分けなければならない単語が多くあるが、有核については聞き分けが必要な単語はごく少数に限られていた。それに対して、5 拍体言では、無核・有核ともに聞き分けが必要な単語が多くあり、それだけ音調型の認定が難しくなるという問題点もある。今後音調型の認定の精度を高めることが必要である。

すでに佐藤(1985)などで指摘されている事柄であるが、複合名詞の式保存に関して、前部要素のアクセントに関わらず、複合名詞が高起下降式になる例が、世代差と無関係にかなりあることを再確認した。先に中井(2001, 前掲)で、3 拍までの和語体言では、京阪方言で高起平進式の語(1 類所属の語)は伊吹島では高起非下降式で対応するのに対して、4 拍体言(語種はさまざま)では、高起非下降式よりも高起下降式で対応する語が多いことを指摘した。これらの現象は、伊吹島方言において、高起下降式が 3 式の中で無標であることを示すものであろう。

次に、資料(a)の式音調について考察を行った。高起下降式と高起非下降式の 3 つの式音調について音響分析を行った結果(中井 2009)、従来耳で聴く調査によって指摘されていた、世代差の実態(和田實・佐藤栄作・上野善道各氏)を音響音声学的な観点から解明した。本研究開始以前に、亀田裕見(2006)「四国北東部における下降音調の音声学的比較」(『音声研究』10-1)などの音響分析による研究があったが、未だ研究の余地が多く残っていた。本研究で新たに明らかにしえた事柄は、以下のとおりである。

高起下降式の音調において、下の世代では、語頭から 2～3 拍目あたり、下降の右斜面に凹みが出来て、「高」から「中」に下がるが、上の世代ではそのような凹みがみられず、下降の度合いも相対的に小さい。

高起非下降式の音調において、上の世代ではほとんど下がらず、おそらく生理的な理由でわずかに下がっても再度上昇して下降を打ち消そうとするのに対して、下の世代では、ごくわずかながら下降が見られるようになっている。

上の二つの世代差の結果として、高起下降式と高起非下降式の、音調の下降の「幅」は

世代にかかわらずほぼ同じであって、2 式の音韻対立は確固としている。しかしながら、音調の下降の度合い・音調の方向がわずかながら異なるわけである。

また、録音資料(c)の京都方言と録音資料(a)の伊吹島方言の式音調を比較し、京都の高起平進式は伊吹の上の世代の高起下降式よりわずかに下降の度合いが小さいものの下降がかなり大きいこと、全体の形状が異なり、下降の開始が語頭付近にあることなども指摘した(中井 2010)。

伊吹島方言については、式音調以外の面についても分析を進めつつあるが、成果の公刊に至らなかった。また、資料は公にできていないものの、瀬戸内海島嶼方言のアクセントについても考察を進めつつある。

録音資料(b)については、会話資料の文字化を行ったが、録音状態が必ずしもよくないものが多いことと、伊吹島方言全般に関する中井の知識不足から、文字化作業は非常に手間取った。幸い、録音者である三好兼光氏の詳細な御教示が得られたため、精度を上げることができ、助かった。会話に聞かれるアクセントの分析にまで至らなかったが、アクセント研究の前提となる作業として、方言の一般的特徴の記述を行い、CD-ROM 中の pdf ファイル・最終年度の印刷物の中に収録した。伊吹島アクセント史を考える上で方言全般の特色の考察は間接的に有用であるが、従来の研究が少なかったということもある。文法面では、香川県本土の方言と著しく異なる特徴は少ないが、いくらかの点で相違点があることを明らかにした。音調に直接関わる事柄として、句末・文末に見られる終・間投助詞、ノー・ノ・ノン・ナー・ナ(以上句末及び文末に現れる)、ネー・ネ(以上ほぼ句末に出現が限られる)の用法及び音調について考察を行った。そして、ノー以下について、以下のような点を明らかにできた。音調以外の面も含めて述べると：ナー類は四国本土の方言の影響で使われるだけである；ノンは目上に使うというのが録音の範囲では使用例僅少で考察困難である；ノー類は同等目下を中心に使う；ネー類の待遇度は不明である；ネー類はナラティブの場合、話の比較的最初の導入部分・話が佳境に入る前の部分に多いが、ノー類などにはそのような偏りが無い；ネー類とノー類はともに、H1 型(高起非下降式で第 1 拍に核)と H0 型(高起非下降式無核)が現れるが、ネー類には H1 型が多く現れる；H1 型と H0 型の意味用法の違いは今後の検討課題であるが、H0 のほうが聞き手に対する働きかけの度合いが大きいように感じられる。

なお、本研究の目的とは異なるが、録音資料(b)は昔話・民話の類を含んでおり、その方面での資料としても活用可能である。録音者三好兼光氏がそのための資料整備を進め

ておられる。

(c)の京都方言の録音については、上述のように、(a)の伊吹島方言のアクセント調査録音資料と比較し、京都アクセントと伊吹島アクセントの式音調の対照を行った。そして、上の世代の伊吹島の「下降式」音調は京都とそれほどには違いがない可能性があることを指摘した(中井2010)。

京都方言については資料整備に追われたため、本研究の期間中には、式音調以外の研究の展開を十分に行えなかった。

なお、資料(c)は、実際的な京都・京阪アクセント習得のための資料・教材としても利用が可能である。中井は教育実践における使用も試行しつつある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

・中井幸比古「伊吹島アクセントの式音調について」『神戸外大論叢』(査読無)60-6号2009年1-19頁

・中井幸比古「京都アクセントの式音調について—伊吹島アクセントとの比較を中心に—」『神戸外大論叢』(査読無)61-6号2010年31-52頁

[学会発表] (計1件)

・中井幸比古「和田實・妹尾修子による伊吹島方言アクセント録音資料について」音声文法研究会 2009年6月27日(音声言語研究所)

[図書] (計1件)

・中井幸比古『香川県伊吹島方言録音資料について』2012年 本科研による報告 1-93頁

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

下記7件

下記a～cの7枚のDVD-ROM, CD-ROMを作成した(ISSN1883-6704)。a及びcはDVD-ROM、bはCD-ROMである。

・a『和田實・妹尾修子録音による伊吹島アクセント資料—方言アクセント録音資料(1)—』(平成20年度)。

・b『三好兼光録音香川県伊吹島方言会話資料—方言アクセント録音資料(3)—』(平成21年度)

・c『録音・京都アクセント辞典(1)～(5)—方言アクセント録音資料』(2)(4)(5)(6)(7)—(平成20～23年度)

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

中井 幸比古 (NAKAI YUKIHIKO)

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：10221441

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし